

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 3月 31日現在

機関番号：35413

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20760432

研究課題名（和文） 近代期朝鮮半島における名所型住宅地、別荘地の開発実態とその生活

研究課題名（英文） Development of housing and villa as scenic place
and life in modern Korea

研究代表者

砂本 文彦（SUNAMOTO FUMIHIKO）

広島国際大学・工学部・准教授

研究者番号：70299379

研究成果の概要（和文）：

植民地下の朝鮮半島における名所型住宅地や別荘地の開発と生活について研究したものである。こうした付加価値のある住宅地開発は、都市生活の豊かな状況を享受した新興層の多様なライフスタイルを受け止めたものであるが、同時に貧困層の流入による人口増加を受け止めていた面もあった。本研究では、京城の民間住宅地開発の総体の把握と明水台住宅地などの典型事例の研究を重ねることで、日韓の学界での研究状況を進展させた。

研究成果の概要（英文）：

This paper focuses on the development of housing and villa as scenic place and life in modern Korea under Japanese rule. These attractive developments were required by the rich class with urban life. And the poor class also dwelled at the left sites of developments in the late 1930s. Through researches on private developments in Keijo and Meisuidai / Myeongsoo-Dae residential area, this study gained academic recognition in Japan and South Korea.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：工学

科研費の分科・細目：建築学・日本近代建築史

キーワード：朝鮮半島、名所型住宅地、別荘地、近代

1. 研究開始当初の背景

従来、近代期の朝鮮半島に関する都市研究は、日韓の両言語に通ずる必要性や両国の国際関係による資料収集の困難さ、あるいは歴史的立場の相違から、あまり進んでいなかった。

だが、近年、日韓両国の社会学、文化人類

学の研究が急速に進み、これまでの理解とは異なる朝鮮半島の近代の姿が明らかになりつつある。

建築・都市史分野でもイ・ギョンアや石田潤一郎、金珠也、中川理らのグループ、そして砂本文彦が、京城の郊外住宅地開発の研究を通じて、都市形成の知られざる一面を明ら

かにした。

これに加え、砂本はかつて「科学研究費を受けて近代期朝鮮半島のリゾート地開発について研究し、僻地にあるホテルを中心としたリゾート地ばかりでなく、都市近郊のアーバンリゾート地も形成されて、余暇生活を展開する別荘住宅地開発があったことを確認した。さらに京城郊外には、単なる郊外住宅地ではなく、風光の良い名所を積極的に開発し、市民への余暇空間の提供も目的とした開発があったことを把握した。

例えば、京城郊外の明水台住宅地は単に住宅地を建設するだけではなく、漢江を望む高台から、梅、桜を植樹した街路、展望台、地泉を整備し、付近の山に登山する散策コースも形成しようとしていた。名所型住宅地と言えるだろう。

また、京城から鉄道で連絡する日本海側の松田の別荘地は、海水浴と白砂青松の風光を売りにした「別荘遊園地」として販売された。新興層のための別荘地開発と言える。同様の開発は、同じ日本海に面する元山や、黄海に面する京城近郊の仁川にもあった。近代期朝鮮半島には、余暇性を伴った住宅地計画の実態があったと思われる。

以上より、これら大枠として把握されてきた住宅地にかかわる都市研究を、子細なレベルにおいて遂行していく必要があった。

2. 研究の目的

植民地下の朝鮮半島では、意外にも、こうした名所型住宅地の開発や大規模な別荘地開発が行われ、余暇を楽しむことのできる住空間が提供されていたことは、先に見たところである。こうした付加価値のある住宅地開発は、都市生活の豊かな状況を享受した新興層の多様なライフスタイルを受け止めたものであるが、その実態は、いまだ明らかではない。

本研究では、次の具体的な開発箇所（事業体）を対象とした調査を積み重ねることで、まず、その総体について子細に明らかにし、近代期朝鮮半島の名所型住宅地、別荘地の詳細を解明する。

以上より、近代期朝鮮半島の名所型住宅地、別荘地開発についての概要、開発思想、空間特性を考察し、住宅地研究の新しい展開として位置づけ、さらに未来への継承方法を検討することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究は、次の五段階からなる。

(1) 資料調査

以下の資料所蔵箇所において、新聞、

雑誌、公文書、設計図書などの収集を行う。

日本；国立国会図書館、国立公文書館、日韓文化交流基金図書館他
韓国；国立中央図書館、ソウル大学校附属図書館、国家記録院他

(2) 現地調査

韓国；仁川月尾島、大川他に訪れ、現況の確認とヒアリングを実施する。

(3) 研究打ち合わせ

日本、韓国の研究者らと打ち合わせを行う。

(4) 収集資料の分析

(5) 考察と論文作成

これらの研究方法を複合的に行うことで、検証可能な研究の進展を留意する。

4. 研究成果

京城府の郊外住宅地の形成については平成19年度の予備調査で終了していたため、本研究においてはまず、1930年代に漢江南で木下榮により行われた明水台住宅地開発について調査した（図1）。

この事例を選択した理由は研究の背景でも述べたが、これまでの植民地下の郊外住宅地形成の常識を覆す典型と考えたためであり、だがその開発の子細と研究上の位置づけはこれまで全く調査研究されていなかった。砂本による調査により、次のような特性を把握した。

(1) 漢江の風景を取り込みつつも、主な居住者として想定した日本人が好む、日本的風景を見立てた名所形成を意識した郊外住宅地形成を目指した。

(2) 開発中期には朝鮮人向けの学校誘致を積極的に行って、朝鮮人学童の下宿も建つ学園都市形成を目指した。

(3) 日中戦争後は、富裕層ばかりではなく、貧困層も居住し、日本人、朝鮮人の雑居となり、居住者は朝鮮人が大半を占め、町会運営では日本人が半数余りだった。



図1 明水台住宅地の販売広告

明水台住宅地の開発とその居住者の生活は、たえず京城の都市拡大の諸要因から他律的に規定されており、これまでよくいわれてきた「郊外住宅地」＝「日本人富裕層の住宅地」＝「別世界」のごとく、単純な図式は成立し得ないことを実証的に示した。特に、この研究成果を韓国の研究機関を通じて現地でも発表できたことは特筆に値する（雑誌論文欄、学会発表欄参照）。

雑誌論文では、京城の郊外住宅地形成の全体を概説しながら、明水台という漢江の南に位置する郊外住宅地の、およそ10年にわたる住宅地形成を跡付けした。明水台住宅地の形成にみられる変化が、京城の郊外居住に求められた住宅像の変化と連関をもっていること、また明水台住宅地開発の想定する居住者像の変化に応じて、風光明媚な日本人向けの住宅地であった時期、朝鮮人学童らを収容する学校の誘致を行った学園都市形成期（表1）、資材難にともなう住宅難と人口急増によりスラム化していく時期にわかれていたことを明らかにした（表2）。

それぞれの時期について、開発者である木下栄の言説や明水台町会の組織・民族構成について各種資料を突き合わせることでその構成と推移を明らかにし、考察を行った（なお、町会組織については詳細な表となるため、本報告では掲載を省略する）。

本研究による成果は日本のみならず、韓国において韓国語でも発表し、韓国学界の成果としても位置付けたことは大きな特色の一つである。

表1 明水台に誘致された学校と宗教施設

学校名及び宗教施設名	種類	購入(坪)	寄付(坪)	その他
恩齋学校	私立		2500	木下は豊梁津にある恩齋学校を明水台の校地に移転させ、12学級の校舎を三万円で計画。(京城日報1936.3.29)
女子専門学校	私立 任水信			市内から中央保育を移転させ、女子専門学校も設立する計画 1938年に移転開校(朝光 4巻7号 1938.7)
中央保育学校	私立 任水信	11000 (10万円)	1500 (寄宿舎用)	1940年7月 寄宿舎完成(京城日報1940.7.31) 女子専門学校は1946年に設立 寄宿舎用地は木下の寄付による。(朝鮮中央日報1936.1.16、柳河新報1936.2.1)
商工学校			1000	京城商工実務学校、1936年6月に新築移転 解放後に任水信が合併(中央大の記録による)
京城徳谷福音堂			1000	
大雲本願寺			500	
日蓮宗明水寺			500	
内金剛山聖賢總院			150	
善野山分院			500	
人の道教團(PL教團)			100	

表2 明水台住宅地と明水台町会の人口推移

年	明水台住宅地		明水台町会(黒石町・銅雀町)	
	総面積(坪)	世帯(世帯)	人口(人)	世帯(世帯) 人口(人)
1930	3만			
1932		20		
1933		35		
1934		50		
1935	15만	70		
1937		400	2000	
1940.4				8500
1940.5				2130 11958
1940.9				2500 12000
				日本人 130 朝鮮人 2370
1941.8				2650 17000

京城日報、柳河新報から確認

その他に、図書(『図説ソウルの歴史—漢城・京城・ソウル都市と建築の六〇〇年』単著、河出書房新社、全143頁、2009年)としても京城府の郊外住宅地形成の全容と名所型住宅地の展開について言及し、広く一般的な研究成果として社会に還元したことも特筆に値する。

雑誌論文、図書に公表した研究成果以外にも本研究に間接的に関連する資料の収集、現地調査を終えている。ただ成果として公開するにはまだ補足調査が必要であり、これらについては近年度中に追加調査をなし、成果をまとめて公表したいと考えている。

今後は、住宅関連施設のみばかりではなく、朝鮮半島の近代社会を支えた施設群を構成した社会事業施設などの研究を進めることで、朝鮮半島での生活を支えた生活系インフラの包括的研究を進め、当時の生活と施設群の関係を明らかにしていきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

砂本文彦 : 경성부의 교외주택지에 관한 연구 명수대주택지를 둘러싼 언설과 공관을 중심으로 (京城府の郊外住宅地に関

する研究 明水台住宅地を巡る言説と空間を中心)、서울학연구(ソウル学研究)、35 卷、pp147~246、2009 年

〔学会発表〕(計 1 件)

砂本文彦：

京城府の郊外住宅地に関する研究 明水台住宅地を取り巻く言説と空間(韓国語)、ソウル市立ソウル学研究所定例発表会、2008 年 11 月 20 日

〔図書〕(計 2 件)

砂本文彦：

歴史構築的志向から復元される公共空間 / ソウルが獲得する新たなアイデンティティ、『歴史文化遺産の変化記録と市民認識調査を通じたソウル都心のアイデンティティ研究』共著、ソウル学研究所、pp. 189~198、2010 年

砂本文彦：

『図説ソウルの歴史 — 漢城・京城・ソウル都市と建築の六〇〇年』単著、河出書房新社、全 143 頁、2009 年

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

(2) 研究分担者 ()

研究者番号：

(3) 連携研究者 ()

研究者番号：

6. 研究組織

(1) 研究代表者

砂本 文彦 (SUNAMOTO FUMIHIKO)

広島国際大学・工学部・准教授

研究者番号：70299379